密葬に1400人 しめやかに

一代で特色ある学園、相次ぎ創立

加計勉名誉理事長は、強い意志とリーダーシップで幼稚園から大学院まで33校園を経営する加計グループを一代で築きあげた私学経営の〈巨人〉ともいうべき功労者でした。

密葬当日は、葬儀直前に会場に設置されたTVモニターで理事長の半生を描いたドキュメンタリー映像「教育こそわが人生―加計勉の歩んだ道」（OHKテレビ制作、主演・辰巳琢郎）が放映、参列者は改めて名誉理事長の偉大な足跡をしのびました。

広島文理科大以来の級友でもある倉敷芸科大の添田喬学長は、会場でTV各社の取材を受け「理科大の設置が文部省（当時）から認可された時の加計さんの感激ぶりが今も目の前に浮かびます」と当時の思い出など語られました。（添田先生は5月11日付の山陽新聞でも追悼文を書かれています。）

中央が安倍前総理、左が塩崎元官房長官、右が加計輝子夫人

安倍前総理も列席

東京から直行の安倍前総理は、沈痛な表情で会場入り、塩崎元官房長官と最前列で読経を聞いたあと焼香。葬儀のあとも会場に残られ、玄関先での出棺まで待機、最後の見送りもしていただきました。

加計、高梁学園の創設者 加計勉氏が死去

85歳

岡山理科大や倉敷芸術科学大、吉備国際大など学園を運営する加計学園、高梁学園の創設者で、私学振興に尽くした岡山理科大や倉敷芸術科学大など学園を運営する加計勉（かけ・つとむ）氏が四月三十日午後十時二十八分、心不全のため倉敷市の病院で死去した。八十五歳。

東広島市出身。自宅は岡山市津島福居二丁目。

四月一日午後一時から岡山市御津中山三八五、御陵国際交流会館で、喪主は長男孝太郎（こうたろう）氏。後日、学園葬を営む。（31面に関連記事）

広島文理科大（現広島大）卒。原爆で荒廃した広島市街を目の当たりにし「平和社会実現には教育が不可欠」との考えから一九五五年、大学系列の高梁学園を設立し、教育事業に乗り出した。六一年に加計学園、六七年には高梁学園を創設。現在、大学から幼稚園・保育園までを法人約三十校園を擁する教育グループに成長させた。

「個人の能力を最大限に引き出す」が教育理念。中でも、岡山県内の公私協力方式で九一年に開校した吉備高原医療専門学校（現吉備国際大）では、全寮制の少人数教育による全人教育を実践。また国際的な視野を持つ人材育成のため、海外の大学との交流も積極的に進めた。

地域での教育振興と国際貢献の功績が高く評価され、藍綬褒章、三木記念賞、岡山県文化賞、勲二等瑞宝章、山陽新聞賞（教育功労）などを受けた。

加計さん悼む各界 「教育県岡山に寄与」

来岡した米国、ブラジルの大学生と談笑する在りし日の加計勉さん＝1988年7月

加計学園、高梁学園の創設者で名誉理事長の加計勉さんが四月三十日夜、亡くなった。

一教育者から岡山理科大や倉敷芸術科学大などを擁する教育グループを一代で築き上げ、岡山県内の私学振興や国際交流に尽力した。

各界からは悼む声が相次いだ。（1面関連）

「理科教育の重要性に早くから目を付ける」など教育県岡山の発展に大きく寄与された」

加計さんと岡山大の千葉喬三学長（六七）、岡山理科大と連携協定を結ぶ計画を進めていただけに「成功を見届けていただけなくて非常に残念」と声を落とした。

広島文理科大（現広島大）数学科の同期だった倉敷芸術科学大の添田喬学長（六五）は「岡山理科大の設置が認可された時、広島都市への四年制大学開学は大英断で、本当に感謝している。『域』と川の町・高梁を、『ドイツ・ハイデルベルクのような学園都市に』という熱意などを、館内の足跡紹介コーナーで今後も伝え続けたい」と話した。

学校を高梁市に開設。九〇年には吉備国際大を岡市との公私協力方式で開学させた。

市職員として短大誘致にかかわり、その後市長を務めた樋口修さんは「山あいの小さな町に、高梁を、『歴史の町』と呼ばれるようにさせたい」という。

同大教授で、同市奥鞆地区にある加計美術館の児島塊太郎館長（六〇）は「加計先生の国際化への思いや若い人の熱意などを、館内の足跡紹介コーナーで今後も伝え続けたい」と話した。

歳人口の減少が予測され、大学新設が難しかった時代、倉敷市の細尾淳治企画財政部次長（五九）は「大学を生かしたまちづくりという市の意向をうかがってきた」という。

同大教授で、同市奥鞆地区にある加計美術館の児島塊太郎館長（六〇）は「加計先生の国際化への思いや若い人の熱意などを、館内の足跡紹介コーナーで今後も伝え続けたい」と話した。

山陽新聞（08・5・2）1面（右）と31面

15か国と交流協定 国際協力にも力

加計名誉理事長は、1970年後半より学園として国際的な連携が不可欠であるとの考えから、海外諸国の高等学術機関と教育交流協定を結び、様々な国際交流活動を推進してきました。

ライト、ブラジルの学生を迎えて記念植樹

これらの活動により双方の学生・教職員は良い意味での国際的な刺激を受け、学園は大きな活力を得てきました。

いま加計グループでは中国、韓国のほかアメリカ、イギリス、フランス、ブラジル、台湾、オーストリア、など15か国、69学園、1美術館、1研究機関、5語学センターと交流しています。

この功績が高く評価され米国のライト大、フィンドリー大、シェネンドーア大、ブラジルのパラナ・カトリカ大、パラナ連邦大、英国のサンダーランド大の6大学から名誉学位を贈られています。

弔辞

加計グループ33校12万人の卒業生を代表し、弔辞を述べさせていただきます。

私共の敬愛してやまない加計勉名誉理事長の突然の悲報に接しましたのは5月1日の早朝のことでした。

加計先生との出会いは、いまから44年前、私が岡山理科大学の第1期生として入学した第1回の入学式でした。そして卒業後は同窓会活動を通じ、数々のご指導と励ましを戴いた私にとって、その訃報は大きな衝撃と共に数々の想い出が駆け巡りました。

岡山理科大学での第1回入学式の光景は、今でも鮮明に脳裏に焼きついています。4月28日、今からすると遅い入学式でありました。

40歳、堂々とした体躯の加計先生は、私共143名の入学生に対し「入学は易く、卒業はしにくいアメリカ式の大学を目指す。その覚悟を持って勉学に励んで欲しい」と明言されましたね。自らも教壇に立たれ数学の講義を担当。1期生で卒業できたのは実に半数に充たない64名でした。

私達はその4年間で先生と共に「フロンティア精神」を身に付けることが出来ました。先生のお宅にも何回か呼んでいただき、奥様手作りのカレーライスをご馳走になったのも懐かしい思い出です。

以来40年の歳月が経った現在でも、先生の提唱された「建学の理念」は卒業生ひとり一人に受け継がれ、各界・各層で活躍しています。

加計先生との数多い思い出の中から、今でも忘れることが出来ない、エピソードを二つ紹介させていただきます。

それは平成5年10月30日の出来事です。同窓会愛媛県支部総会が松山で開催されていました。その日、先生は倉敷芸術科学大学の開学準備のため文部省に出張されておられました。同窓生の皆さんには「残念ながら欠席される」と報告し会を開催していた折でした。突然電話が入り「今、東京から松山空港に着いた、あと少しで会場に駆けつけるから…。」との連絡がありました。会場の出席者一同みんなびっくり、同時に一斉に拍手が沸き起こりました。そして会が終わり、帰りの電車に乗り腰を下ろすや否や、加計先生はにっこりと微笑みながらポケットからウイスキーを取り出し「これから、飲みながら岡山に帰るぞ！」と豪快に笑っていらっしゃいました。

岡山駅に着いたときは、すでに日付けも替わっていました。この日は加計先生の「古希の祝いの会」が開催されることになっていたので「先生！今日は岡山国際ホテルで先生のお祝いの会が開催されるのに申し訳ありません」と話すと、「文部省に行くときゃ～絶対時間厳守だけど、ハア、ワシの会なんか、どうでもええよ！」と大きな声で笑われながら話されました。

当時、支部総会は年に5・6回各地で開催されていました。先生は多忙な身にもかかわらず、殆ど出席され大学の様子を熱っぽく語られ同時に、卒業生を叱咤激励されました。

同窓会に出席された時の先生の口癖は、まだ若輩者の私共卒業生に対し、いつも微笑みを浮かべながら「いつか母校はキミ達卒業生のお世話になるときが必ずくる！その時は宜しく頼むからのー」と言われていましたね。

先生のお蔭でやっと、我々も恩返しできる年齢になることができました。加計グループ12万人の卒業生がひとり一人の力を結集し、それぞれの母校発展のために尽力させていただくことをご霊前にお約束させていただき、弔辞といたします。

加計勉先生、本当にお疲れ様でした。天国から我々卒業生並びにグループ校の活躍をいつまでも見守りください。

平成二十年六月二十八日

学校法人　加計学園
岡山理科大学　一期生
岡山理科大学前同窓会会長　黒瀬　秀吉